

肝腫瘍診断における 造影超音波検査の進歩

第3回ソナゾイド研究会●報告集

ソナゾイド研究会は今回で第3回目を迎えた。ソナゾイドが本邦で承認され、市販された2007年1月から約2年半が経過したが、ソナゾイドはこの間、およそ約15万人に使われたと思われる。ソナゾイドの静脈内投与による造影超音波検査に伴う有害事象はきわめて少なく、アナフィラキシーのような重篤な有害事象は現在まで報告されていない。診断薬では20～30万例に1例の重篤な副作用を持つものもあるので、さらなる経験が必要かもしれないが、ソナゾイドの安全性が非常に高いことが証明されつつある。

その有効性についてはどうであろうか。ソナゾイドの添付文書上の適応症は肝腫瘤性病変の造影である。現在では一般の臨床で、肝腫瘍性病変の検出、鑑別診断、局所治療支援治療評価など幅広い領域で使われるようになった。

さらに、今後のがん治療の主役になるとされる、分子標的がん治療薬、特に血管新生因子阻害剤の有効性の早期予測において、造影超音波検査の感度が高いことが言われている。今回の研究会でも、基礎の領域で、動物実験によるソナゾイド造影超音波検査の有効性の成績が報告された。また、ソナゾイドを使った造影技術の面では、汎用機を使った造影超音波についての報告があった。汎用機による造影の工夫と限界についてまとめられていたが、これは、今後造影超音波が広がるためには必須の事柄であり、有意義な発表であった。

診断の部では、肝腫瘍性病変の病変検出のルーチン検査としてのソナゾイド造影超音波についての発表があった。ルーチン検査の方法やその成績、また、肝細胞性結節の鑑別診断・悪性度評価に関する報告があった。特にEOB-MRIは、早期の肝細胞がんの診断に有用なことが期待されており、それとソナゾイドの組み合わせによる検査体系

は、今後の肝がん診断の柱になるものと思われる。

肝血管腫をはじめとする良性の腫瘍性疾患は、非侵襲的な検査法である造影超音波が重要な役割を果たす領域であり、今回の造影画像の読影に関する報告は貴重であった。

肝がんの治療支援におけるソナゾイド造影超音波の位置付けは、量的にも質的にも広がりを見せている。今回の研究会では、肝がんの経カテーテル治療やRFAの効果判定にいかに関与したソナゾイド造影超音波を役立たせていくかといった、方法論や臨床成績が示された。

いまや、造影超音波による治療ガイドなくしてはRFAが行えない肝がんの症例が増加している。特にKupfferイメージガイド下に腫瘍を穿刺することは、小病変を同定し、腫瘍の範囲を正確に知ることによって、正確な穿刺を行うことができ、その結果、治療成績を向上させることが明らかになりつつある。

治療支援の部では、外科医による術中造影超音波検査の報告が2題あった。術中造影超音波検査は、手術のシミュレーションに使われると同時に、小病変の検出、鑑別診断、悪性度診断につながるということが報告された。これにより肝切除術の正確さが増し、より治療効果が向上することが期待されている。同時に、術中に行われるということから、体表からの検査に勝る利点を生かすための工夫が必要となる。

以上のように、今回の研究会は、ソナゾイド造影超音波の現在を見すえ、将来を展望するすばらしい内容になったと言える。

森安 史典

東京医科大学消化器内科教授